

令和7年度 第1回 小田原市社会教育委員会議 概要

- 1 日 時：令和7年7月1日（木）午後2時から午後4時まで
- 2 場 所：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、石塚委員、齊藤委員、佐志委員、佐藤委員、藤原委員、箕輪委員、山田委員、山本委員
- 4 職 員：柳下教育長、大木文化部長、湯浅文化部副部長、門松文化部副部長、田村子ども若者部副部長、蓑宮生涯学習課長、小林文化財課長、竹縄図書館長、穂谷野スポーツ課長、遠藤生涯学習課副課長、一寸木生涯学習課副課長、廣瀬社会教育指導員、大谷社会教育指導員、古矢社会教育指導員、渋谷生涯学習課主査
- 5 傍聴者：1名

6 概 要

1 委嘱状交付

佐志委員、佐藤委員、藤原委員及び山田委員へ、柳下教育長から委嘱状を交付した。

2 教育長挨拶

柳下教育長から挨拶をした。

3 委員紹介及び職員紹介

出席委員及び職員から、簡単に自己紹介を行った。

4 報告事項

（1）附属機関への委員の推薦について

資料3に基づき、一寸木副課長から説明した。

（質問等なし）

（2）令和6年度主要な社会教育事業の結果について

資料4に沿って、生涯学習課、文化財課、図書館、スポーツ課、青少年課から説明。

（質疑）

【齊藤委員】事業の参加者について、年齢層や市内外の別などの詳細はどの程度把握されているか。良い事業が多いと思うし、リピーターが多いことは大変ありがたいことだが、そうした詳細のデータがあれば、例えば、新規の方、新住民の方たちも入っていきやすいような戦略作りになる。小田原の魅力づくりに役立つと思う。参加者がどのような方たちなのか「知る」「捉える」こと、「見える化」することによって社会教育事業の価値も高まると考える。

【蓑宮生涯学習課長】

「夏休み子どもおもしろ学校」や一日体験講座など、応募時の段階やアンケートにより一定の情報を把握しており、それらをもとに効果的な講座等の展開を検討していきたい。

【箕輪委員】青少年課事業について、子どもたちと関わる大人については、昨今、いろいろな

問題が出ているが。技術面だけでなく、そうした面の対応はどうか。

【田村子ども若者部副部長】

講師は専門指導者を県と相談しながら選択しているが、技術面だけでなく、コミュニケーション面や子どもへの配慮についても相談したい。

(3) 令和7年度主要な社会教育事業の予定について

資料5に沿って、生涯学習課、文化財課、図書館、スポーツ課、青少年課から説明。

(質疑)

【箕輪委員】中学生対象の沖縄の戦争関係記念事業については資料に記載がないが。

【養宮生涯学習課長】

総務課で行っている平和事業のことと思う。社会教育事業として直接行っているものではないが、戦争は昭和時代の大きな出来事であり、本日から郷土文化館において昭和を題材にした企画展を行っている。

4 協議事項

(1) 生涯学習センター事業の現状と課題及び研究調査テーマを踏まえた検討について

前回の会議までの振り返りについて、資料6に基づき一寸木副課長から説明した。

(質問等なし)

引き続き、サークル・団体の支援について、地区公民館活動支援について及びそれらの課題について資料7から資料9に基づき一寸木副課長から説明した。

(質疑、意見)

【山本委員】今後の課題として、教育長がおっしゃった「社会力」に通じる部分だと思うが、障がい児、病児、障がい・病児きょうだい児である子どもたちが参加できるような工夫について考えさせられた。

非言語コミュニケーション、多様なコミュニケーション力、引き込み力、寛容な社会力、健常者との関わり方など、新たに作るのではなく、いままで作ってきたものに加えて、彼らの必要なこと、その子たちがトライしたいと思ってきたことをトライできるサポートができるのではないかな。背景やサポート力、複数課における事業など、今後の検討課題になると思うが、願い、総評として述べさせていただく。

【一寸木生涯学習課副課長】

事業を組むときに、知らず知らずのうちに縦割りにとらわれてしまう部分があることについては、身につまされる思いがあり、これからどのようなことができるのかは課題となるが、社会力を育むという面からも、できるところから行っていきたい。

【山本委員】インクルーシブと言われるが、健常と呼ばれる子どもたちにとっても、大きな学

び、大きな発見があり、どちらにとっても良いと思う。

【蓑宮生涯学習課長】

多様な方が一緒に学ぶことによりお互いの学びにつながると言われる。関わる人の数、他課との協力、準備等、いろいろなことがあると思うが、重要な視点であると考えている。

【木村議長】 インクルーシブと言われるように、健常者だけでなく障がい者の方も使えるようなことを考えないといけない。そうした面について学校現場での対応はどうか。

【藤原委員】 社会教育という切り口になると思うが、中学校においては、支援級、通常級の子たちとの学びについては、行事や活動の中で一緒にやっている。活動のベースが異なるので、配慮事項の共有という面において、個々に活動している団体もいる中で、そうしたところのすり合わせが難しい面もあると感じた。

【山田委員】 国や県もそうだと思うが、「たがいの違いを認め合う」ということに力を入れてやっており、インクルーシブの考え方を全校児童で理解し合うということを朝会や集会でやっている。障がいを持つ子どもたちが平等に参加できないことに対し、どれだけそれに社会が歩み寄れるかというところがベースになっている。
たとえば新玉小学校では、新玉学区に住んでいる小田原支援学校の生徒さんとの居住地交流を年に2、3回行っており、身近なところに障がいのある子がいることを知ったり、本校のバザーにお招きしたりするなど、小学校ではそういったベースを育みつつ行っている。

【齊藤委員】 資料6の検討の視点ごとの現状把握の表については、「検討対象となる取組み」が性格の異なる項目が横並びとなっており暫新だと思った。

障がいのある子どもも横並びであるということについては、国の生涯学習の方針でも出されており、従前から言われていることではあるが、それを「見える化」しているかどうか課題となると思う。

また、資料9の課題として挙げられていることの中で、事業の参加者が高齢化、固定化していることについて、その突破口はないか考えた。子どもの社会力を育てるという点を考え、子どもたちも含めて多くの方はお祭りが好きなので、例えば、そのフェスティバルのためのブースを準備して生徒が自分たちで区画をもってお店を持つとか、その日のために、その日に合わせて準備するようにすれば、子どもたちが参加する取り組みにもなる。従来型の組織の体制とかフェスティバルのやり方ではなく、新規の方の参画、子ども参画、若者参画という視点でやってみると、また、子どもたちへの自信にもつながる仕掛けにつながるのではないか。

また、お金が介在することでインセンティブが高まる。素晴らしい展示物がある

と、それ欲しい、買いたいと思う気持ちがある。フリーマーケットや京都にある手作り市のように、サークルの人たちが持続的に活動できたり、展示物を販売するとか、お金が介在する取り組みを入れていくことで、学び、活動、一気に人を集めることもできるのではないかなと思う。

コミュニティビジネス的なこともあると思うが、見る、展示、学び合うだけでなく、見本市とか、手作り市などはとても人が集まるので、生涯学習の観点とちょっとずれがあるかもしれないが、そうした、ちょっとした「とぼ口」を試験的に導入してみるのはいかがでしょうか。

【佐藤委員】生涯学習フェスティバルは何回か来ている。舞台発表が多いという印象だが、子どもを連れて家族で行ってみると、例えば、太鼓を叩いているのをただ見るのではなくて、実際に叩いてみたり、体験型があると良いと思った。体験型を増やせたら次につながっていくのではないかな。

また、公民館事業について、高齢化の課題が挙げられているが、何々協議会といったものが多く、地域の方は、いろいろな役職を同じ方がやっている例が多い。公民館大会などについても、私たちからすると、もう少し簡単な仕組みにならないかなと感じる。簡素化していくと次の世代も入っていきやすいと思う。

【佐志委員】山本委員と同じで、何かしらのハンデをかかえた人たちをどう引き入れていくかについて考えた。神奈川県では「ともに生きる」を掲げているが、例えば障害程度の重い方が同じ場所で同じように楽しめるのかについては、そのご家族も含めて難しい面もあると体感したことがある。一緒の場所で一緒に楽しむだけが「ともに」ということではないということを感じたこともある。一緒にやる、その場所だったら楽しめる、そういうものをミックスしながらできるといいのではないかな。子ども会やPTA、自治会活動に参加してきたが、確かに役割を担うことの大変さもあったので、業務の整理をしていくとか、活動を整理していくという考え方は、今の時代、働き方も含めて即していると思う。何を残し、何を抜けていくのかということを検討していてもいいのではないかな。児童相談所の業務では、子どもが主体であるとはいえ、子どもたちを主体的な取り組み者として活動や支援にどう入れていくのかについてはまだ課題も大きい。昨年度仕事をしていた所属は、乳児院、障害児施設、児童心理治療施設の3つの施設があったが、施設の大きな行事に子どもたちも実行委員として参画し、子どもたちは、自身が主体的に取り組み、手ごたえを感じたことで、それ以外の場面での交流や参画を希望し始めた。子どもたちが主体者として作り上げる行事などもあっていいのではないかな。

【石塚委員】災害時の避難は学校などの広域避難所になると思うが、地区公民館の活用は、Wi-Fi 施設を含めてどのような想定をしているか。

【一寸木生涯学習課副課長】

能登など災害が発生した現地レポートによると、地区公民館のような場所で身を寄せているという実情もあったようである。小田原市では避難は広域避難所となるが、各地域としては、自治会所有の地区公民館は、いざという時に逃げるのできる拠り所となっているのではないかと。また、Wi-Fi 設置についてだが、災害時に使えるかどうかという問題はあるのだが、電波が途切れるまではいかない場面において利用いただくことを想定している。

【笹井副議長】 イベントの一つの在り方として、単純に「踊る人」と「見る人」という線的な関係だけではなく、例えば杉並区の「大人塾」のように、一堂に会して、見本市というか、あるブースの人が別のブースの人にちょっかいを出すというような、いろいろ混ぜこぜに立体的にしていくと、思わぬ価値やアイデアが生まれたりしておもしろいのではないかと。齊藤先生のおっしゃったマネタリーにからめることも一つの方策だと思う。

また、地区公民館については、地区公民館と生涯学習センターは同列ではなく、それらの社会的役割は違うものと捉え、例えば飲食など、地区公民館については良い意味でルーズな部分があって良いと思う。田舎の公民館でフリーマーケットをやったことがあるが、わいわいがやがやと結構人が集まりおもしろい。地区公民館においても、住民べったりではないところからも発想すると良いのではないかと。

障がいのある方の学習の一例として、東京都内の特別支援高校の活動事例がある。「りんごプロジェクト」といって、本が置いてあるコーナーが「りんごの棚」といって、目の不自由な方が訪れて、点字で検索して、録音図書などで読書ができるというもので、民間のNPO法人が行っている。ちょっとした工夫でいままでのハードルが、がくんと下がることもある。また、東大医学部の熊谷先生は車椅子の先生で、一般の人に、理屈ではなく手足が不自由な状態を体験させる、当事者を体験するワークショップを社会教育の授業として行っている。最後に、子どもの社会参加についてだが、子どもたちはゲームやSNS、バーチャルにはまっている子が多くなっているので、社会とのつながりを持たせるには工夫が必要となる。殻を破るための一案として、子どもと大人の仲介役として「大学生」がいることで子どもが生き活きと活動したという経験がある。

【佐藤委員】 障がい児の話で思ったことだが、子ども教室では、子どもたちは普通に受け入れるが、むしろ保護者の理解が大事となる。サポートする世代の側の育成が必要である。急に「サポートに入ってください。」といわれてもドギマギしてしまう。間の世代、親世代の勉強というか、「体験」のような何かあると良いと思った。

【木村議長】 様々な意見をいただいたが、本日はここまでとしたいと思う。司会をお返しする。

【菰宮生涯学習課長】

障がいのある方も無い方も、一緒に参加して一緒にいろいろなことをやってみて、そこから学びがあること、また、地区公民館についても、もっと自由であって良い、関わる人たちも、なかなかやり手がない中、がんばってやっただけに感謝している面があるが、そこにちょっとした仕組みを加えることで新たな世代が入っていけるようにすることなど、委員の皆さまから様々な意見をいただき感謝している。

【事務局】 次回の社会教育委員会議は、令和7年8月下旬を予定している。別途、ご案内を発送するので御承知願いたい。

【菰宮生涯学習課長】

それでは、本日の社会教育委員会議はこれを持ちまして閉会とさせていただきます。

閉会

※なお、有賀委員については、別の会議に出席するため途中退席した。退席の際に、御意見を記入した書面を事務局が収受した（以下のとおり）。

【有賀委員からの意見】

【資料9】のサークル・団体の支援の「課題」になりますが、「活動団体数が減少している中、学びを通じて人と人とのつながりや関わりを作り出し、活動へとつなげるために講座開催や学習情報、学習相談の充実が必要と考えるが、具体的にどのように展開すべきか。」に関し、子育て広場について、2つ例を紹介したい。

まず、一つ目に、先日、子育て広場のミニ演奏会にオカリナグループの方をお呼びしました。以前、子ども教室でもお世話になったグループで、高齢者施設での演奏の経験はあるようでしたが、未就園児の前での演奏は初めてということで、今回は一番小さいお客さんでわくわくしたと話されていました。4名の方に来ていただきましたが、子どもたちひとり一人に手作りのマラカスを用意してくださり、オカリナの曲に合わせて一緒に歌ったり、踊ったり、楽しい時間を過ごすことができました。やはり、活動へとつなげるためには、さまざまな活動の場を提供し、活動の場を広げる手助けが必要ではないかと感じています。日ごろの練習の成果をいろいろな場面で発揮できれば活動も充実してきますし、人と人とのつながりも自然と生まれるのではないかと思います。

次に二つ目になりますが、これはサークル・団体の支援ではありませんが、小田原短期大学との連携ということで、毎年、子育て広場では、短大の学生ボランティアを受け入れています。今回、私が関わっている「だるまっ子」では、学生ボランティアの受け入れはありませんが、明日、広場で行われる七夕祭りにおいて、学生さんが授業で製作した七夕の製作物を子どもたち全員にプレゼントすることになっています。お母さん方には作品に対するアンケートをお願いし、今後の学習に役立ててもらおうということです。まず、大学生など若い世代の方々に小田原にはたくさんの地域子育て広場があることを知ってもらい、ボランティアとしてサポートに

入ったり、プレゼントを製作したりすることで、子どもたちやお母さん方のために自分でもできることがあることに気づいてもらいたいです。そして、今後、将来的には子育てサークルを支える力になってもらえればありがたいです。若者世代の活躍が少ない中、学生での貴重な体験を生かし、今後の「学び」につながるきっかけ作りになればと思います。若者の活躍に期待したいところです。

最後に放課後子ども教室での活動になりますが、現在、週2回、時間も限られているため活動団体の方をお呼びしてのイベントがあまりできていない状態です。せっかく Umeco の方から市民活動団体の紹介冊子をいただいているので、機会があればぜひ活用していきたいと思います。活動団体の皆さんとの関わり、つながりの中で子どもたちと楽しい時間を共有できたらと思います。